

賀川豊彦

献身
100年

神戸文学館 ● 企画展

愛の労苦と希望

賀川豊彦の文学



「私のすることは神の事業である。
神の事業であれば神助け給う」
(武内勝口述「賀川豊彦とそのポランテニア」四九P)
先生はマタイ伝25章40節の
「あなたがたによく言っておく。
わたしの兄弟であるこれらの
最も小さい者のひとりにしたのは、
すなわち、私にしたのである」とあります聖句を、
そのままに実行していただけるのであります。
(同上書三二P)

賀川豊彦は1909年12月24日、クリスマス・イブの日在当时神戸最大のスラムだった「新生田川地区」に入って、救霊救貧活動を開始した。やがて貧困者を生み出さないために労働運動の指導者となり、農民組合を育て、消費組合を始め、関東大震災が起ると直後に東京での活動を開始するなど、日本の社会運動の殆どの草創に関わり、またキリストの伝道者として日本中、そして世界中を駆け回った。平和運動家でもあった。その著作も神学、哲学、経済学、社会学、労働組合論などの運動論、さらに宇宙論まで幅広いが、空前の大ベストセラー小説「死線を越えて」をはじめとする文学作品のウェイトも大きい。「僕は詩人だ」と賀川豊彦は生前よく言っていたという。賀川豊彦の残した詩、小説、童話などから「彼が何を考えて、何のために、いろいろな活動に取り組んでいたのか」を感じ取ることができないだろうか。

展示資料

- 原稿 「壁の声きく時」「太陽を射るもの」「再生」
- 手稿 「死線を越えて」
- 雑誌 改造第2巻第1号「死線を越えて」
雄弁「一粒の麦」
- 書籍 「死線を越えて」(海外翻訳本を含む)
「銀河系統」
- 書簡 徳富蘇峰より「涙の二等分」の御礼
徳富蘆花より「太陽を射るもの」の御礼
- 挿し絵 「空中征服」
- 日記 「健闘録」「溢思記」
- 写真 など約100点

記念講演

- ◎11月29日(土)
「賀川豊彦の文学」
田辺健二(鳴門市賀川豊彦記念館館長)
 - ◎12月6日(土)
「賀川豊彦と遠藤周作—
日本文学の中のキリスト教」
山折哲雄(国際日本文化研究所名誉教授)
 - ◎1月24日(土)
「祖父 賀川豊彦の周辺」
賀川啓明(社会福祉・学校法人イエス団理事
カガワデザインワークショップ代表)
- いずれも、
●時間 午後2時～3時半 ●会場 神戸文学館
●定員 50名、申込先着順。 ●参加料 200円
参加申し込み・お問い合わせ078(882)2028

入館
無料

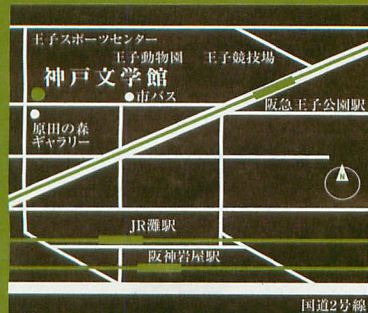
期間 2008年11月1日(土)～

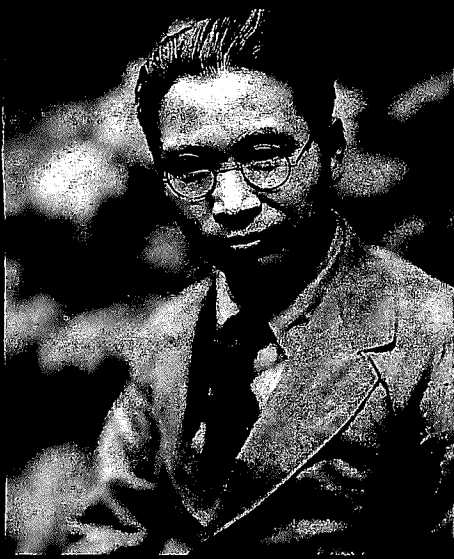
2009年2月24日(火)

休館 毎週水曜日(休日の場合は翌日)
12月28日～1月4日

神戸文学館

〒657-0838 神戸市灘区王子町3丁目1番2号
(王子動物園西隣) 電話・FAX 078-882-2028





略歴

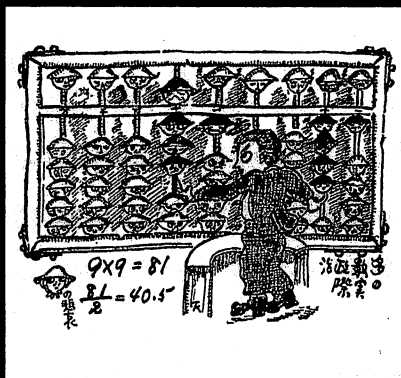
1888年(明治21年)7月、神戸に生まれる。5歳のとき両親とあいついで死別、徳島に転居。13歳のとき肺結核を発病、重篤状態になったが「死線を越えて」再生。徳島中学校時代に宣教師C・A・ローガンや宣教師H・W・マヤス博士と出会い、受洗。1905(明治38)年、明治学院高等部神学予科に入学、1909年(明治42年)21歳の冬、神戸・新川に移り住み、キリスト教伝道、隣保事業を開始した。25歳で芝ハルと結婚。

事業を中断して、プリンストン神学校に入学、神学学士号の学位を受け、帰国。再び神戸においてキリスト教伝道と社会事業をはじめ。労働組合運動、農民運動、協同組合運動、無産政党樹立運動に献身し、関東大震災直後、東京に移り罹災者救済やセルツメント事業に力を尽くす。彼の事業や運動は全国的な規模で展開。また世界の各地でキリスト教伝道を行い、戦後は世界連邦運動を提唱、指導した。

キリスト教社会主義の立場から宗教、哲学、経済、社会、文明批評、随筆、小説等350以上もの著作を発表した。代表作『死線を越えて』『一粒の麦』『空中征服』など。

1960年(昭和35年)4月23日東京上北沢の自宅にて召天、71歳。

神戸文学館・企画展
愛の労苦と希望—
賀川豊彦の生涯—
賀川豊彦
献身100年



1922年(大正11年) 風刺小説『空中征服』の自証挿し絵



神戸・新川における賀川豊彦の活動は、資本主義社会が生み出す歪みを是正するための壮大な実験として多くの人に注目された。彼は労働運動、生活協同組合運動、農民運動等の運動を興し、指導的役割を務めるとともに、神から与えられた使命の伝道活動にも活躍、1926年に「神の国運動」を展開し、多くの人の魂を救う伝道者の役を果たした。アメリカで出版された“THREE TRUMPETS SOUND: Kagawa, Gandhi, Schweitzer”(A. A. Hunter, 1939)は、ガンジー、シュバイツァーと並んで賀川を世界の三聖人の一人とし、その活動を讃えている。

幼少時の経験から、賀川は人の心の奥底にあるやさしさや寂しさを愛し、その心情を多くの文学作品に残している。詩集「涙の二等分」(1919)は、賀川の幼い貰い子への切々たる愛情が綴られ、評判となった。当時、文学者達は賀川の活動に感激し、しばしば新川に賀川を訪ねている。

与謝野晶子は夫・鉄幹とともに新川を訪れ、まだ無名であった賀川の「涙の二等分」に長い序文を寄せ、後に「賀川豊彦さん」という詩を発表する。徳富蘇峰は1920年に賀川を訪ね、賀川の活動を物心両面で支えた。賀川も大先輩である蘇峰を「私は人間主義です…」「(先生は)日本でたった一人の先生」と尊敬している。蘇峰の弟、徳富蘆花は、関東大震災の際に賀川の取った行動について「賀川豊彦君に」と題して東京朝日新聞に寄稿、「私は震災後のあなたの働きを一度も見てはいないが、その働きは新聞に取り上げられ…その働きの一つひとつが新たな日本の形成のために最も必要な働きをしています」と書いた。大江健三郎は「大正のはじめの日本の貧しい生活をしてきた人々をいさよと描いた作家としては、賀川豊彦をまず挙げねばならない」としている。

賀川豊彦の生涯の中で基本的に大切なことは、いかに人々を愛することができるかということであり、愛するための方法としてのいくつもの運動(それぞれ時代の制約はあったが)であった。小さな子ども、貧しい生活者に対して、彼の心はいつも純粋であり、優しさを湛えていたのである。

神戸文学館は、関西学院が神戸、原田の森にあった時の神学部のチャペルで、ここでは私の父、善輔が母満子と結婚式を挙げたところでもあり、私も原田の森時代の父と同じく関西学院の中学部の卒業生です。

私と父と賀川豊彦先生とは同じくキリスト教の牧師で父が1年先輩の同労者でしたし、私は中学時代から賀川先生の伝道集会で何回も先生の情熱的な伝道説教を聴いています。先生は、自分の結核病記を小説「鳩の真似」に書き、32歳の時、トラコーマによる眼疾を持ちながら、改造社からベストセラーとなった「死線を越えて」という小説を書かれましたが、長い間の神戸のスラム街での生活、今であればホームレスの集合している中での彼らとのタッチの中での執筆であります。

先生には小説のテーマはたくさんあり、その環境の中から、小説を通して伝道をしたという動機で世間に広く読んでもらうために小説の形式で著述されたものと思います。

先生は25歳の時、米国のプリンストン大学で学び、文学的教養の他に、自然科学としては、生物学や天文学、さらに理論物理学などについてのかかり深い知識を学ばれ、先生の著述や説教の中には自然の中に啓示された神の人類への大きな力についての神学と自然科学の融合が説かれ、その上に社会学的実践活動の中で神様の福音を述べ伝えられ、また世界平和を説かれたのです。

先生は、最後は東京の世田谷区上北沢のご自宅で、心筋梗塞に合併した尿毒症が進行して亡くられました。私は昭和34年12月25日のクリスマスの朝、先生をご自宅に往診しましたが、その時、先生は米国の友人から送られたW・オスラーの内科教科書(16版)の扉に寝たままで、こう書かれました。この字は先生の絶筆でしょうから、極めて貴重なものだと思います。

「太陽は 世界隅々
照らし行けど、
之を敵ふ 罪の黒幕

之を取り去る愛と十字架
感謝の1959年クリスマス
賀川豊彦